

NEWSLETTER of
the Japanese Society for Applied Animal Behaviour No.11
January 2008

年頭挨拶

会長 近藤誠司
(北海道大学北方圏フィールド科学センター)



明けましておめでとうございます。会員の皆様におかれましては、健やかな新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

2007 年は亥年で、あわただしく首相が交代したり、米国のエネルギー政策の転換を機に穀類が高騰し、家畜飼料の価格が跳ね上がったりとイノシシらしい年でした。子年の今年は、どのような年になりましょうか。

2002 年 3 月に設立された本応用動物行動学会も、本年 3 月で 6 年となります。その間、2005 年には麻布大学で ISAE Japan を開催するという偉業を成し遂げ、また会員も少しずつですが増加しつつあります。喜ばしいことは、若い方々の活躍が目覚ましい所です。活動の主体は、30 代から 40 代の世代になっており、他の学会では見られない若々しい活動が展開されている様相は、ご同慶の至りです。今後もさらに 20 代まで含めて若手がのびのびと活躍できるよう願っておりますし、またそうした流れを作り出すのが古手の役目だと自らを戒めております。

昨年の年頭挨拶では、イノシシにかこつけて、野生動物による被害についてふれましたが、この問題は今年も大きな課題として私ども応用動物行動学研究者に関わっております。昨年末 12/14 に成立した議員立法「鳥獣による農林水産業等に係る被害防止のための特別措置に関する法律」では、総額で 30 億円近い予算が組まれました。それぞれの地域で今年は一層盛んに対策が組まれることでしょうか、私どもの役割も重いものと思います。

家畜福祉についても同様です。今年こそ、EU など諸外国の動向を見極め、我が国、もしくはアジアを基盤とする私ども自身の家畜福祉を確立していかなばならないでしょう。これについては、昨年の岡山大学における日本畜産学会のあとに、前会長の佐藤衆介先生を中心に有志による検討会が行われました。本学会を土台として、こうした社会の流れを見据えつつ、2008 年を乗り切っていこうではありませんか。会員皆様の一層のご活躍を祈念いたします。

2008 年度応用動物行動学会大会の予告および演題募集

副会長(大会委員長) 上野吉一(東山動植物園)



2008 年春季研究発表会を以下のように開催します。

日時:2008 年 3 月 28 日(金) 9:00 ~ 18:00

場所:常磐大学 R 棟 002 ミニシアター

交通:水戸駅北口 5 番バス乗り場から自由ヶ丘下車(所要時間約 20 分)

共催:日本家畜管理学会

申込みは以下のようにお願いします。

1)発表希望の方は、2008 年 1 月 15 日(火) ~ 1 月 21 日(月)の期間に、発表演題、発表者氏名(全員)、および連絡先を添えて、下記までご連絡ください。

上野吉一(東山動植物園・企画官)

E-mail: y_ueno@rd.city.nagoya.lg.jp

Fax: 052-782-2140

2)要旨原稿は、A4 サイズ 2 枚とし、講演要旨作成要領(本学会ホームページからダウンロードできます http://karamatsu.shinshu-u.ac.jp/lab/ethology/jsaab_index.htm)に従って作製して下さい。そのまま縮小オフセット印刷します。原稿の締切は 2008 年 2 月 22 日(金)といたします。原稿の送付先は、以下のとおりです。

〒229-8501

神奈川県相模原市淵野辺 1-17-71

麻布大学獣医学部動物応用科学科

動物行動管理学研究室

応用動物行動学会 編集委員長 植竹 勝治

畜産動物以外にも展示動物、実験動物、伴侶動物と、さまざまな動物の問題行動や環境エンリッチメントなどについてぜひどしどしと話題を提供してください。動物の幸せ、動物と人により良い関係を築くための皆様の工夫をお待ちしています。

2008 年度春季シンポジウム開催「計画中」のお知らせ

シンポジウム担当幹事 青山真人(宇都宮大)



3 月 27 日-29 日に常磐大学で開催される第 109 回日本畜産学会大会(3 月 28 日には本学会 2008 年度春季研究発表会も開催されます)に合わせ、小規模ながらシンポジウムの開催を計画しております。詳細はまだ決定しておりませんが、日時は畜産学会大会期間中のいずれかの時間(2 時間程度)、場所は常磐大学、テーマは本学会の

伝統である、「博士号を取ったばかりの若手研究者に、博士論文の内容を紹介してもらい、皆で鍛え上げる」という主旨のものです。詳細が決まり次第、メーリングリストでお知らせをさせていただきますとともに、3 月に出版予定の Animal Behaviour and Management 44 巻 1 号に掲載致します。

書評(畜産技術 2008.1 より一部改変して転載)

野生馬を追う ウマのフィールドサイエンス

木村李花子 著

東京大学出版会 A5判 194 頁

2007 年 8 月 本体 2800 円

家畜ウマの野生種は、ウシの野生種であるオーロックスがそうであるように、現在地球上には存在していない。開発による生息地の減少、乱獲、家畜化によりウマの野生種は数百年以上前に絶滅したものと考えられている。一方で、家畜ウマは逃げ出したり放棄されたりして野生に戻った場合、条件が合えばたたかに生き延び、繁殖を繰り返し、自然破壊の元凶と目される存在ともなりうる。北アメリカのムスタングやオーストラリアのブランビーが有名だが、これらは正確には再野生化馬と呼ばれる。

かつて人の手で家畜として飼われていた動物とはいえ、人による管理を離れ、自然に適応して生活しているウマの生態を知ることは、家畜ウマの飼養管理面で有用な情報を与えてくれる。本書は、学生時代に自然環境下でのウマ達の生態に魅せられて研究を開始した著者の四半世紀におよぶ研究史だが、その発展の方向はきわめて自由であり、その意外性に感銘さえおぼえる内容となっている。

著者が最初に観察の対象とした集団は根室沖に浮かぶユルリ島のウマ達だった。この集団はかつて昆布の運搬のために島に連れて来られたウマが基となっているが、再野生化馬というよりは、人為的管理が最小限に抑えられている、いわば粗放に飼われている家畜ウマといえる。とはいえ本書に記述されている観察記録は、普通に放牧されている家畜ウマではまず目にするのできないことばかりである。

二番目に観察の対象としたのは大西洋に浮かぶカナダ・セーブル島のウマ達である。新大陸を目指して航海中の船が難破し、海に放り出された積荷のウマが泳ぎ着いて再野生化したという伝説を持つ集団である。著者はこの集団に関して、主にフェロモンというテーマで、対象に密着して観察を試みている。そしてあることが著者は、ハレムの所有雄が独占していると考えられてきたハレム内の発情雌に対する交尾を、他の群れの雄がハレム所有雄の気がつかないところでせっせと行っているところを目撃しているのである。

研究は、さらにケニアのシマウマ、そしてインドのロバへと発展していくのだが、著者の研究者としての生き方や軽やかさが面目躍如となるのは、インドにおけるロバの仕事を書いた最終章であろう。インドでは家畜ロバ(野生種はアフリカノロバ)とインドノロバのハイブリッドの調査を進める。しかしここに至って著者による記述と考察は、数字やデータから解き放たれ、きわめて自由なものとなっている。それまでの既成の

行動学に敬意をこめた記述から、著者が言う「民族生物学」への変容という意外性は、二十数年前、書評子が著者に始めて会ったときの印象、すなわち「セレブの可愛いお嬢さんと思ったら、とんでもない酒豪だった」にあい通じるものである。

最後に、何ページにもわたる口絵のカラー写真が素晴らしいこと、また本文中に大胆にレイアウトされた写真も一見に値することを記しておく。なお本作品は 2007 年度 JRA 馬事文化賞を受賞した。

(JRA 競走馬総合研究所 企画調整室長 楠瀬 良)

編集後記

新年、明けましておめでとうございます。

平成 20 年第一弾のニュースレター (No.11) は、3 月末に茨城県水戸市で開催されます春季研究発表会ならびにシンポジウムの予告を中心にお届けいたしました。2006 年 4 月にニュースレター担当幹事を仰せつかってから 2 年間の任期もあと数ヶ月、今回が、おそらく私が編集、配信する最後のニュースレターになるかと思えます。原稿依頼や編集作業、配信などの際に不手際も多々あったかと思えますが、皆様どうか御了承下さい。また、応用動物行動学会のますますの発展に、微力ながらも協力させていただきたいと思えますので、皆様今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

(ニュースレター担当幹事 河合正人)